

松田町立松田小学校

研究テーマ：分かり合う喜びのある授業の創造
～「見て聴いて 考えて つなぐ学習」を通して～

1、実践の目的

「分かり合う」の「分かる」とは、児童が授業の中で「分かった」「できた」という思いをもてる授業をめざすことである。「分かり合う」の「合う」は、学習の根底に流れる人間尊重の教育を大切にしたものである。

このテーマの実現に向けて、サブテーマを設定した。「見て聴いて」「考えて」「つなぐ」の3つは、それぞれ判断力・思考力・表現力に置き換えられる。児童が主体的に学び、自分の考えを持ち、それを的確に表現することができるような授業を、教師自らが創り出すことが大切である。この授業の中で、特にどの力を育みたいかを教師が明確にすることで、児童の学びも明確になり、より深い学びにつながれると考える。

そのためにも、どのような授業を構成するのがよいのか、多くの可能な方法を考え、自立的、創造的に授業創りに取り組みたいと考え、実践を進めることとした。

2、実践の内容

(1) 校内研究の体制

校内研究を進めるにあたり、低・中・高学年団の研究推進委員と、学校長、教頭、教務主任、研究主任で研究推進委員会を組織した。研究推進委員会で本校の今年度の研究テーマや方向性を話し合い、校内研究全体会で提案・決定し、教職員全体で校内研究を進められるようにした。研

究授業を行う際、低・中・高の学年団で指導内容の確認や検討を行うことで、学年をまたいだ学習の系統性を把握できるようにした。

(2) 研究授業、研究協議の様子

今年度、研究を推進するにあたって、具体的な教科を算数と道徳とした。(特別支援学級では自立活動)各学年で1回ずつ提案し、それを教職員全員で参観。その後、研究全体会で協議を行うことにより、授業力の向上を教師全員で図れるよう取り組んだ。

研究テーマである「分かり合う」ことを、児童がより実感できるよう、学習問題の精選について、各研究授業で取り組んだ。授業の導入で提示された学習問題から、何が課題となるかを児童と見極め、設定する。児童自身が「解決したい」という思いを持つことで、学習に対する積極性に繋がり、児童が協力して課題解決に取り組む姿勢が育まれると期待される。

例えば、6年生「比」の実践では、原液と水との分量が違うジュースを見せ、「同じ味か？」という問題を提示した。そこから「数は違うが、割合は同じか？」という学習課題を設定していた。生活に基づいた問題を提示し、児童と共に課題を明確にしていくことで、児童の「解決したい」という思いを持たせることができていた。

算数ではアドバイザーとして横浜国立大学の池田敏和教授を招き、授業についての指導助言や講話をしていただいた。道徳では、筑波大学附属小学校の加藤宣

行先生に、教師を対象に授業をしていただくと共に、「考え議論する道徳」について講話をしていただいた。

研究授業を重ね、そのたびに協議し、多くの助言をもらうことで、教師の授業力を高めることができていた。

(3) ICTの活用

研究を推進するにあたって、ICT機器の活用について模索していくこととした。現行指導要領では学習の基盤となる資質・能力の一つとして、言語能力などと同様に、「情報活用能力」が位置付けられている。情報活用能力の育成のためには、一人一台端末の活用が必須となると考えた。

例えば、4年生算数の実践で一人一台端末を活用した。児童が問題解決のために考える手立てとして、端末にヒントカードを配付した。児童は自分が考えやすい方法に合わせ、それらのヒントカードを選択し、端末に直接書き込めるようにした。また、全体での共有の際には、児童の端末の画像を黒板に拡大提示した。このことにより、互いの考えを伝わりやすくすることができた。友達の考えを参考にしたり比較したりするなど、情報活用能力の育成が図られた。

他にも、5年生や6年生の実践で、ICT機器の活用が図られた。

3、実践の成果

(1) 学習問題の精選と授業構成の工夫

児童が自ら問題解決に取り組めるよう、学習問題の精選と授業構成の工夫に取り組んだ。児童自身が解決したいと思える「課題」につながる「学習問題」の設定。そして、児童全員で解決に向けて取り組み、この授業で分かったことが集約され

るような「まとめ」。それらが児童の自発的な発言や思考からつながる授業の流れを重視し、実践を重ねてきた。このことにより、意欲的に学ぶ姿勢へとつなげることができた。

(2) 数学的活動の充実を意識した指導

思考の過程で具体物、図、数、式などを活用して考えをもったり、話し合ったりできるように意識して授業づくりを行うことができた。具体物の準備、ICT機器の利用などにより、「課題を見いだす」ことや、「課題を自律的、協働的に解決する」ことの手立てとすることができた。数学的な表現の相互の関連を図ることが、思考力・判断力・表現力の育成につながることを改めて実感した。

4、今後の展開

今後も引き続き、問題提起→課題設定・課題解決→まとめの授業の流れを大切にしていきたい。

そのために、数学的活動の意義をより明確にしていかななくてはならないだろう。具体物の操作などの活動だけでなく、学びの過程が見えるよう、課題を見いだす活動や、児童が課題を自律的、協働的に解決する活動などを重視した授業づくりに努めたい。

さらに、これらの学習で身につけたことを、今後の学習に生かせるような系統性を意識させるとともに、身の回りの生活にまで活用しようとする力を伸ばしていくための手立てを、さらに追究していく必要があるだろう。

これらの研究を追究することにより、児童のより深い学びへとつなげていきたい。